



◆プロフィール
1933年6月生まれ。1954年東京大学農学部農業工学科卒業。農林省、東京大学、山形大学を経て茨城大学教授。1999年同大学名誉教授。

2013年2月17日

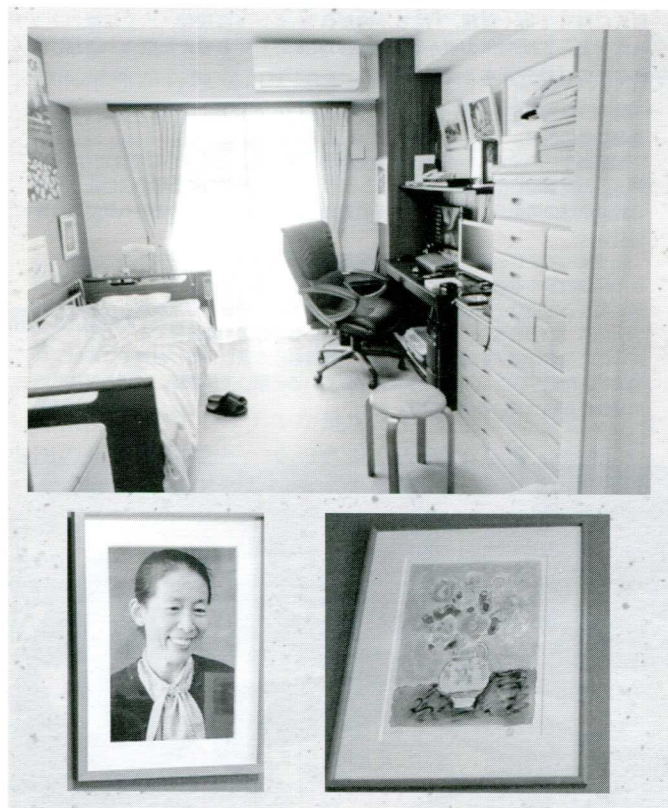
第28回「謎多き「舞姫」を読み解く」

講師：林 尚孝 氏（茨城大学名誉教授 農学博士）

2月17日、介護付き有料老人ホーム「レストヴィラ流山おおたかの森」で、「第28回歯科患者塾・現場セミナー第2弾」が開かれ、10人の会員が参加されました。当日は、午前中に施設の概要の説明を受け、設備や居室を見学し、昼食にはワタミが力を入れている食事を試食し、午後は5階ラウンジでPowerPointを使って「舞姫」は、なぜ書かれたか」というテーマでお話を伺いました。当日の話の骨格部分だけをご紹介します。

レストヴィラは王侯貴族の生活空間

林先生は奥様を2011年1月に亡くされ、ご自身もひどい腰痛に悩まされていたため、2011年12月1日にオープンしたレストヴィラに、当日入居されました。入居当時は杖を突き、50mも歩けない状態でしたが、今では普通に歩いておられます。食事、掃除、洗濯、風呂などのサービスを受け「王侯貴族の生活」だと満足されていました。ちなみに、定員は70名、入居金は580～780万円で、月経費は光熱水料を含め約20万円とのこと。トイレ付き居室は約18㎡で全室同じ構造です。先生の居室を拝見しましたが、書斎、収納、冷蔵庫・食器棚、洗面、寝室と機能的に区分されており、狭いからかえって便利かもしれません。さらに、壁面には奥様が描かれた水彩画や思い出の写真、ポスターなど15点が飾られており、「芳子ギャラリー」とのこと。現状に満足され「ここが終の住処」と言っておられました。



「舞姫」は謎の多い作品

はじめに、「舞姫」という小説の問題点に触れておきます。この小説の筋は、一見美しい悲恋物語のように見えますが、出世のために恋人を捨ててしまう、実に身勝手な男の話です。なぜ、鷗外はこのような小説を書いたのでしょうか。

また、「舞姫」が発表されることの影響も見逃せません。「舞姫」発表当時、新妻・登志子とは1ヶ月前に結婚したばかりでした。豊太郎を罷免した官長とみなされる上官の石黒忠恵にとっては不愉快至極な内容です。それ以上に、鷗外一家は何より彼の出世を願っており、こういう小説を発表すれば差し障りが出るに決まっています。しかも、エリーゼが帰国してから1年3ヶ月も経って、事件のほとぼりがさめた時点での発表です。なぜ「舞姫」をこの時期に発表したのか、それが非常に重要だと考えています。

歪められたエリーゼ像——小説のエリスと実在のエリス

エリーゼは、1888(明治21)年9月12日に来日し、10月17日に離日しました。しかし、その事実を関係者以外はほとんど知りませんでした。彼女の離日から48年後、鷗外の歿後14年目に、その事実が明らかにされました。鷗外の妹・小金井喜美子により、「舞姫」のヒロインと同名のエリスが来日し、築地精養軒に滞在したと公表されたのです。来日女性の名前をエリスとしたために、大混乱が起こり、「実在のエリス」と「小説のエリス」などという使い分けが必要になりました。さらに、「エリスは全く善人だね。むしろ少し足りないくらいに思われる。どうしてあんな人と馴染みになったのだろう」「どうせ路頭の花と思ったのでしょ」。これ以後訪ねてきた女性は売春婦に近い人ではないかと思われるようになりました。さらに、「エリスは穏やかに帰りました。人の言葉の真偽を知るだけの常識にも欠けている哀れな女の行く末をつくづく考えさせられました」とも書いています。実にひどい評価をしています。鷗外の実妹がまさか創作をしていたとは思われず、長い間、来日ドイツ人女性は「金目当て」で鷗外を「追って」来日したと信じられてきました。

エリーゼ像に関する混乱とエリーゼ像の確定

当時の英字新聞の船客名簿が1981年5月に見つかり、Miss Elise Wiegert が彼女の姓名であることが判明しました。これ

により、喜美子の随筆には虚飾の部分があることが判明しました。彼女の姓名が判明したにもかかわらず、「舞姫」にエリスの父の名字がヴァイゲルトとあることから、何と研究者の半分がヴァイゲルト説を主張しました。また、エリーゼについては「永遠の恋人」説、「下宿の娘」説、「娼婦」説、「賤女」説、「ユダヤ人」説などいろいろな説が出されました。「ユダヤ人説」では、研究者の大部分がエリーゼはユダヤ人であると考えていました。エリーゼが帰国させられたのはユダヤ人だったからであるという主張さえありました。小金井喜美子の随筆に端を発し、エリーゼ像に関する混乱は、目を覆うものがありました。

この混乱に終止符を打ったのは、2011年3月に発表された六草いちか著『鷗外の恋 舞姫エリスの真実』でした。教会の資料から、エリーゼの生年月日、両親の名前、妹の名前などを特定したのです。彼女のフルネームはElise Marie Caloline Wiegertであり、現在はポーランド領になっているシュチェチン生まれでした。「舞姫」のなかに突然「ステツチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せんとぞいふなる」という文言が出てきて、読者を戸惑わせます。鷗外は、さりげなくエリーゼの出生地を書き込んでいたのです。六草の発見により、エリーゼ像はほぼ確定し、ユダヤ人説や娼婦説は一掃されました。

エリーゼの来日から離日と赤松登志子との関わり

不思議なことに、結婚のために彼女は来日したという説はほとんどありませんでした。2005年4月に小平克氏と私が、エリーゼは結婚のために来日し、その折に鷗外が軍医の辞表を提出したという説を発表しました。「石黒忠恵日記」、「小金井良精日記」、「西周日記」を詳細に検討した結果得られた結論です。

結婚来日説を否定する論拠の中でも、彼女が帰国してわずか1カ月後に赤松登志子と婚約したのは鷗外に結婚の意思がなかったからだという強力な反論がありました。

エリーゼと結婚できなかった原因は、鷗外の関知しないところで、鷗外と赤松登志子の婚約が結ばれたことにあります。すなわち、9月18日に祖田・於清が西周に赤松登志子との縁談を承知する返事をしたのです。このため、鷗外は不承不承エリーゼとの結婚を諦めたと思われる、小金井が帰国交渉をしているのに、鷗外は別れ話を切り出さませんでした。10月4日小金井の持参した「林子ノ手紙」で、エリーゼは初めて真相を知り、激怒します。この手紙が彼女に渡るとは鷗外は考えていなかったと思われます。自分の口から事情を話さなかったことを恥じ、軍医の辞表を提出してエリーゼと直ちに結婚しようとした。結婚を望んでいるのは鷗外ただ一人であることを知り、彼女は帰国を決断しました。

問題は、エリーゼ帰国1カ月後の11月22日に、赤松家と森家で結納が交わされたことです。エリーゼの帰国後、森家は縁談を進める努力をしたのですが、鷗外は逃げ回っていたようです。そこで奇怪な事件が起こります。西周日記により、11月19日に森林太郎帰国祝と小金井婚祝の会に招かれて上野精養軒に向いたところ、出席者は西夫妻、鷗外、篤次郎、小金井の5人だけであった。森家の策略により、鷗外は西周の面前で登志子との婚約を承諾させられたものと推測され、鷗外は二重の屈辱を味わったものと思われます。

「舞姫」はなぜ書かれたのか

「舞姫」のヒロイン・エリスは、美しく心優しい女性として描かれています。一方、主人公の太田豊太郎は、優柔不断で

無責任な男という対照的な存在です。豊太郎は鷗外の分身と考えられ、鷗外は醜く優柔不断で無責任な自分自身を弾劾しようと「舞姫」を書いたのだろう、と私は考えています。

鷗外の言葉を信じ、単身48日間の船旅をして未開の日本へやってきたエリーゼを裏切り、帰国させてしまったトラウマは、鷗外の生涯を通じて残ります。その悔恨は、「腸日ごとに九廻すともいふべき惨痛をわれに負はせ」というほど大きなものでした。それまで挫折を知らなかった鷗外にとって、恥ずべき挫折であったと思われる。

鷗外は自然科学者であったためか、「舞姫」は理系論文の構成と似た小説です。すなわち、冒頭に小説を書く目的を「恨みを消すため」としてはいますが、この「恨み」は「悔恨」です。悔恨を消そうとして書いたのに、「悔恨を消すことができなかった」ばかりか「良友相澤謙吉」への怨恨が生じたという結末になっています。自分自身に責任があるのに、良友を恨むという情けない男を描いています。自分の意志とは無関係に「林子ノ手紙」が届けられたことを、「舞姫」では人事不省の最中に相澤謙吉がエリスに豊太郎の帰国を告げる形にしていると思います。「舞姫」の主題は、エリスへの深い悔恨と、それをもたらした自分自身の弱さの追求にあると考えています。

「舞姫」発表当時の鷗外を取り巻く環境

「舞姫」をなぜ発表したかは、「舞姫」を読んだだけではわかりません。

「舞姫」が書かれた前後の事情を、かいつまんで整理しておきます。1888年9月12日エリーゼ来日。9月18日森家と赤松家との婚約成立。10月17日エリーゼ帰国。11月22日赤松家と結納交換。1889年1月『東京医事新誌』主筆就任。2月赤松登志子と結婚。3月『衛生新誌』発刊。10月『しがらみ草紙』創刊。11月『東京医事新誌』主筆罷免。12月『医事新論』創刊。1890年1月「舞姫」発表。8月17日から27日まで信州山田温泉に滞在、「うたかたの記」発表。9月13日長男於菟誕生。10月4日弟二人を連れて駒込千駄木町の借家に家出。11月22日登志子と離婚。1891年1月「文づかひ」発表。

実に多様な事件があったことがわかりますが、最も大きな事件は『東京医事新誌』主筆罷免でした。鷗外は日本医学会創立に対し一人だけ反対の意見を述べ、孤立無援の立場に追い込まれました。しかし、翌年には『医事新論』を創刊して、日本医学会についての論争を継続します。その翌月に「舞姫」が発表されたことに注目すべきです。

「舞姫」をこの時期に発表したということは、離婚を予感すると同時に、以後の孤立した闘いも予想しているのではないのでしょうか。いわゆる戦闘的な啓蒙活動を続けるために、この小説は発表されたのではないかと私は捉えています。「舞姫」は悲恋小説の形を取っていますが、鷗外の深い悔恨とともに闘争宣言という内容も含まれていると私は考えます。そういう読み方は私以外の方は誰もしていませんが、この時期に「舞姫」を発表したのは、背水の陣をしくためのスプリングボードにしたのだと解釈しています。

